

第20回宇宙産業・科学技術基盤部会 議事要旨

1. 日時：平成28年6月9日（木） 10：00 - 12：00
2. 場所：内閣府宇宙開発戦略推進事務局大会議室
3. 出席者
 - (1) 委員
山川部会長、青木委員、下村委員、中須賀委員、中村委員、薬師寺委員、山崎委員、渡邊委員
 - (2) 政府側
小宮宇宙開発戦略推進事務局長、佐伯宇宙開発戦略推進事務局審議官、松井宇宙開発戦略推進事務局参事官、高見宇宙開発戦略推進事務局参事官、末富宇宙開発戦略推進事務局参事官、坂部宇宙開発戦略推進事務局企画官
 - (3) 説明者等
東海大学情報理工学部情報科学科 長教授
(一社)漁業情報サービスセンター 爲石専務理事

4. 議事要旨

- (1) その他リモートセンシング衛星開発・センサ技術高度化について
資料1、資料2に基づき長教授、爲石専務理事から説明を行った。説明の後、以下のような意見等があった。(: 質問・意見等 : 回答)

本日説明された事例は、宇宙の技術が産業に実際に貢献しているよい事例である。

現在は沿岸域が観測不可能とのことだが、マイクロ波放射計により沿岸域を観測するためには、何をすべきなのか。

沿岸域では陸からの電波の影響を受けるため、センサーの感度向上やアンテナを大きくすることによって解像度を上げる必要がある。

漁業情報サービスセンターが提供する情報サービスの「えびすくん」を利用している漁船の乗組員は、どのようにして衛星データの利用方法を学んでいるのか。漁業情報サービスセンターの職員が個別に使い方のサポートを行っている。

マイクロ波放射計による観測は継続性を確保するべきであり、観測にブランクが生じないように対策を考えるべき。

「えびすくん」を導入することによって燃油の節約につながるとのことだが、燃油の節約分で、「えびすくん」の利用料を賄えているのか。賄えている。むしろ、「えびすくん」の利用料よりも、通信費が高い状態であり、通信費が下がることを期待している。

マイクロ波放射計は海氷観測以外にどのような利用展開があり得るのか。例えばハリケーンやサイクロン等の気象観測において、米国では評価されている。

マイクロ波放射計は、他のセンサーと同じ衛星に相乗りでもよいのか。

必要なのはマイクロ波放射計による観測データであり、他のセンサーとの相乗りでも漁場情報提供には問題ない。

(2) 技術試験衛星について

資料3、4に基づき総務省から説明を行った。説明の後、以下のような意見等があった。(: 質問・意見等 : 回答)

人工衛星本体と比較して、地上の端末等の周辺機器は低コストで試行錯誤できる余地があるので、こちらにも力を入れて検討すべき。

国際競争力を持つためには低コスト化が重要であるが、その検討は行っているのか。

固定マルチビームと可動・可変ビームを比較した場合、可動・可変ビームの方が使い勝手はよいが開発費が高く、両ビームの搭載割合はコストとのトレードオフである。そのバランスや、高価格ではあるが高機能な機器や技術をどこまで搭載するか、コストを念頭に置きながら検討をしている。

宇宙だけではなく、5G・光等の他のネットワークとの親和性を持つことが重要である。

(3) 宇宙政策委員会中間取りまとめに盛り込むべき事項について

内閣府から説明を行った。委員からは以下のような意見等があった。(以下、意見・質問等)

技術開発をして製品を開発しても、様々な規制等に抵触してしまい、販売や国際展開することができない等のケースもあるため、制度的な観点からも宇宙産業ビジョンを検討すべき。

以 上